

# 酒々井町伊篠白幡遺跡から出土した時期不詳の縄文土器について

蜂屋孝之

## 1. はじめに

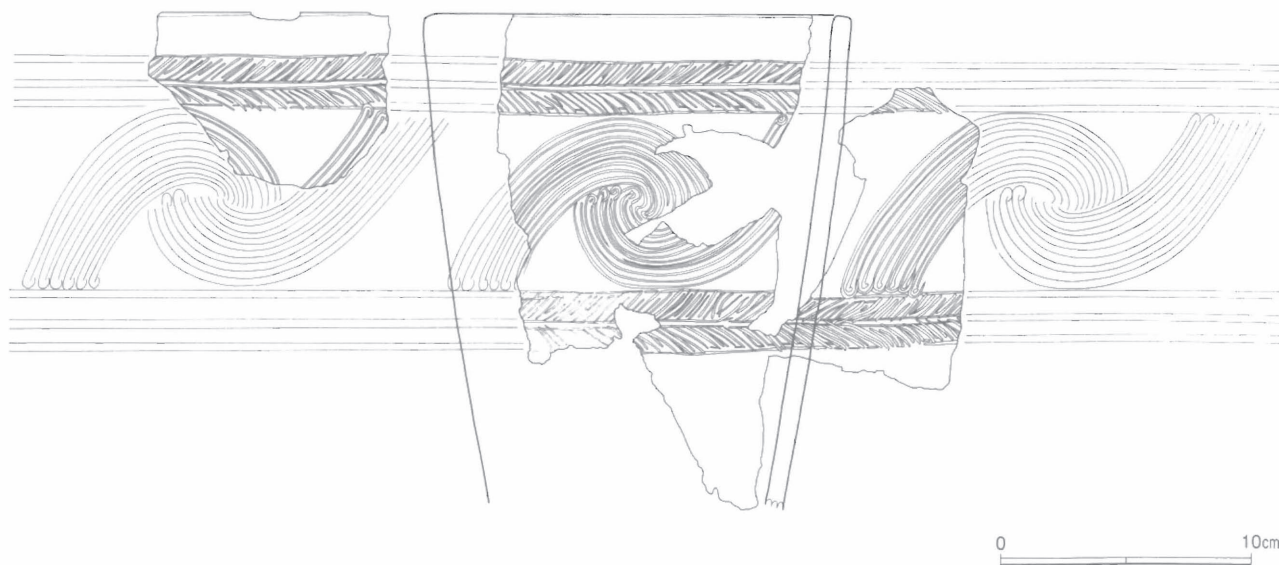
発掘された資料を整理し、遺物の実測や挿図作成・原稿執筆と進んでようやく「報告書」の形が見えてくる。あれやこれやと掲載したいものや書きたい事など数々あれど、時間や予算や自分の能力の限界を目の当たりにし、ある種の諦念に何度となくさいなまれながらも報告書の刊行までやっとのことで漕ぎ着けたことも個人的には、一度や二度ではない。未だ満足のいく報告書がつかれないのは自分の努力が足りないのだと常々反省している。一般的には発掘した資料をすべて報告書に掲載することは難しい。遺跡の規模が大きく遺物量が多ければ多いほどその割合は高くなり、竪穴住居跡に伴う遺物などは大幅に掲載量を割愛せざるを得ない場合も決して少なくない。筆者の場合、縄文土器の分類で悩むことが多く、また刊行後もその掲載量や分類が適切であったかどうか心配になることが多い。ここに取り上げる遺物は、そんな分類上の心配が報告書刊行後もずっと続いている縄文土器の一例である。本誌第40号（宮城1994）で取り上げた筒形の土製品を出土した千葉県酒々井町伊篠白幡遺跡の整理作業

を行っている時に型式どころかいずれの時期なのかも確たる判断がつかないまま、とりあえず後期堀之内式に含めて分類し報告した土器である。最近になって貴重なご意見をいただいたので再び資料を提示し、帰属すべき時期について検討してみることにしたい。

## 2. 伊篠白幡遺跡から出土した縄文土器群

伊篠白幡遺跡は、千葉県印旛郡酒々井町に所在する（三浦ほか1986）。発掘調査によって、縄文時代後期堀之内内式期の竪穴住居跡19棟、古墳時代の竪穴住居跡34棟、奈良・平安時代の竪穴住居跡44棟などが検出されたほか、遺物包含層からは大量の縄文土器が出土している遺跡である。

遺構及び包含層から出土した縄文土器は、圧倒的な量が堀之内内式土器で、それ以外の時期については土器量が非常に少なかった。堀之内内式以外の土器は早期が、田戸下層式、田戸上層式、子母口式、条痕文系土器、前期が黒浜式、浮島・諸磯式、中期が五領ヶ台式、阿玉台式、中峠式、加曾利E式、後期が加曾利B式などである。最も出土量が多かった堀之内内式については堀



第1図 伊篠白幡遺跡出土の土器 (1/3)

之内Ⅰ式が主体であり、堀之内Ⅱ式はⅠ式に比べかなり少なかった。ここに取り上げる縄文土器は、報告書第140図109の土器である。包含層中から出土したもので、第Ⅳ群堀之内式の第11類に含めたものである。本文中では堀之内式とするには異質な文様構成であり、他型式の可能性もある点を述べたにとどまる。

### 3. 出土土器の器形と文様

**器形** 第1図に改めて実測図を示した。報告書中の実測図ではほとんど傾きのないずんどうな器形に復元実測されていたが、今回改めて器形について検討してみると、胴部から口縁に向かって若干の傾きをもって直線的に開き、胴部の膨らみがほとんど見られない器形であろうと推定された。復元口径は17.0cm、残存する高さは19.7cmの小振りな深鉢の土器である。胴部下半から底部にかけては全く欠損し、口縁から胴部についても約半分が欠けている。従って底部の形状が平底なのかあるいは尖底であるのかはわからない。口唇部は角頭状で平らに面取りされている。外面はやや荒れており文様の一部が擦れてしまって不分明な箇所もある。内側の器面調整は丁寧なミガキ、胎土は良好で中粒から細粒の砂粒を混入している。繊維は含んでいない。焼成はよく、内面の色調は赤褐色、外面は褐色を呈している。

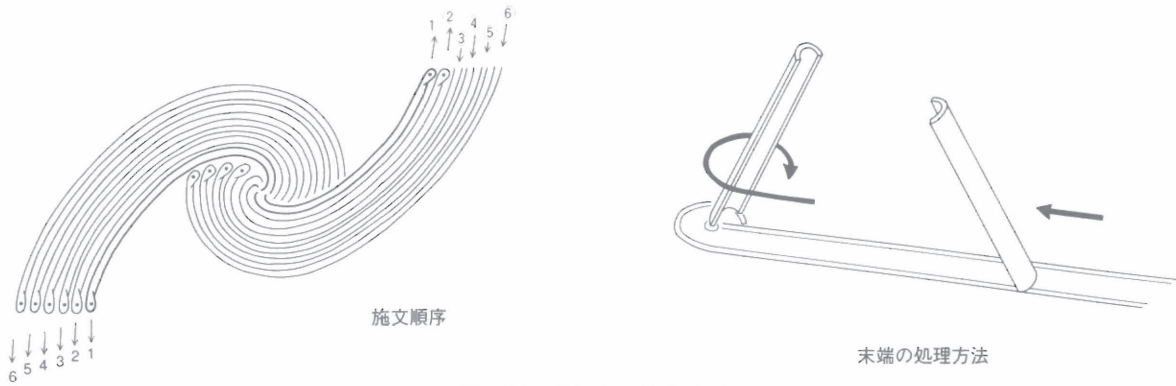
**文様** 施文工具には細い半截竹管が使われ2条1組の

沈線を基本としている。口縁は平口縁で若干の無文帯を伴い、その下に横位羽状の文様帯が上下2段に配置されている。羽状の文様帯に挟まれた広い面には重層する入組文が施されており、横位3段の文様構成となっている。羽状の沈線文は、上下段とも同じ施文順序によっている。まずはじめに半截竹管によって横位3本の沈線を施し、中央の沈線で上下に分割された区画帯には異なる傾きの短い沈線を施して羽状の沈線文を描出している。よく見ると羽状の沈線文の施文には特殊な方法がとられている。半截竹管による施文によって2本の沈線を施した後、次に施す2本の沈線の片方を先に施した沈線の片方に重なるようにして次々と施文を繰り返している。一見雑な施文のようであるが、同じ傾きの沈線を描出する目的だけで行ったわけではなく、意識的に沈線を重ね合わせているものと思われる。

羽状の文様帯に挟まれた幅広い中間帯には重層する入組文が施されており、胴部径とこの入組文の単位幅から3単位の構成をとるものと考えられる。この入組文についても複雑な施文が行われている。残念ながら入組文の中心部と右側部分の施文順序については、部分的な欠損があるため、推測の域をでないが、第2図左に示したような施文順序になるであろう。まずはじめに入組文の中心を決め、そこから割付の基本線となる逆方向の弧線1と弧線①を外側に向けて走らせる。



写真 全形及び部分



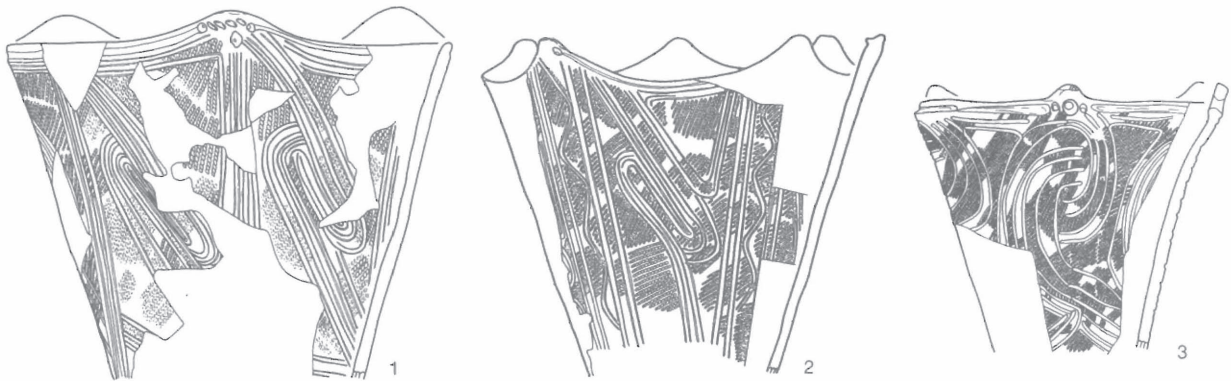
第2図 入組文の施文方法

順次2から6までの沈線を中心から外側に向けて施文し、①の方は②へと進み、③以降は右上方向から中心に向かって沈線を走らせている。施された沈線はそれぞれ6本である。弧線1の末端は磨れてははっきりしないため、あるいは左下端から施文しはじめ、中心でいったん収束してから弧線①へ移る可能性もある。並行する沈線は途中で切れる事もなく、また他の沈線と互いに交わることもなく慎重に施されている。いずれの沈線においても特殊な末端の回転処理が行われているようである。羽状の区画帯に到達する直前で第2図右のように半截竹管の片側を軸にして回転し、末端を丸く収束させている。写真3に示した部分は入組文の末端の状況をよく表しており、この回転処理は一つ前に施文した沈線の一本に重なり合うように細心の注意が払われている。この回転処理は、沈線の施文を開始した段階では行えないものであり、施文工具を引きながら回転させなければ写真3に見られるような切り合いは現れない。文様構成はシンプルで比較的単純な施文の繰り返しではあるが、一部では沈線を重ね合わせ、また一部では沈線同士の干渉を排した施文を行っている。製作者の特殊なこだわりがそこに現れている。と

りわけ沈線の末端で行っている回転処理は、半截竹管を使った非常にめずらしい手法であると思われる。

#### 4. 時期

いったいこの土器はどの型式に所属するのか。前述したように伊篠白幡遺跡から出土した縄文土器の時期は早期から後期に及んでいるが、堀之内式を除けば極めて少なく断片的であった。はたして報文中の第IV群に分類した堀之内式に含まれる土器なのであろうか。第1図の土器の器形は第IV群の深鉢B IV形「底部から直線的に開くもの」に相当する。量的にはこの形の土器量はあまり多くはないが堀之内式全般にわたり存在する器形であり、第1図の土器も平底であればこの器形にあてはまる。口唇部の形態については堀之内式では丸味のあるものが主体で、第1図の土器に見られる角頭状の口唇部の例は少ない。深鉢B IV形に施文される文様は口縁から胴部にかけて施され、胴部下端を横位の沈線で区画しているものもあるが、深鉢B IV形に限らず堀之内I式においては縦区画の文様を主文様として構成されているのが通例である。堀之内II式になると縦の区画文の規制が弱くなり横位に連続する文様構



第3図 伊篠白幡遺跡出土の堀之内I式

成となる。伊篠白幡遺跡の堀之内式の中で第1図の土器の入組文に類似する沈線文，報告書中ではクランク状の沈線文としている例があるので第3図に示した。

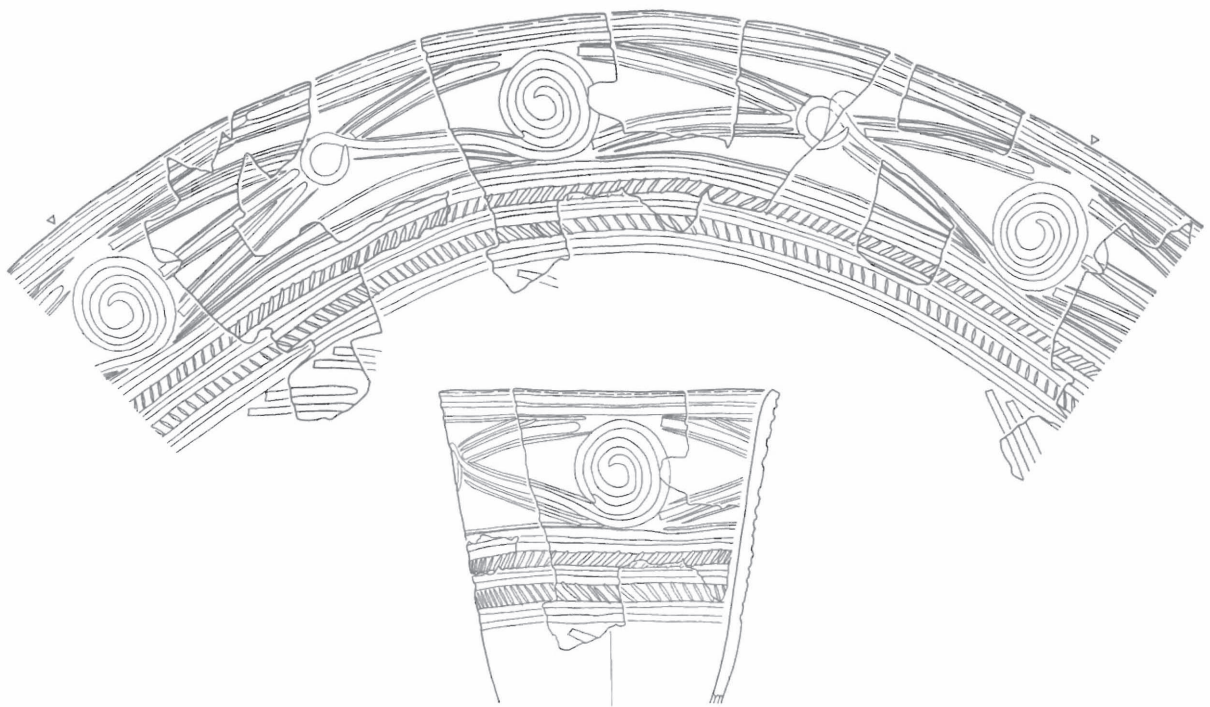
1は半截竹管による施文である。波状縁の下に縦に文様を分割する沈線を施し，単位文様の間を埋めるようにクランク状の沈線文が施されている。2も同様に単位文様の間にクランク状の沈線文が施されている。3は波状口縁の波頂下に沈線による入組文が単位文様として施されている。蕨手文の単純重層化したものと考えられる。1～3の土器はいずれも縄文を地文とし器面を縦に分割する単位文様からなる構成である。クランク状の沈線文は，第1図の土器の入組文と一見類似するようだが，横帯区画の第1図の土器とは文様構成上大きな相違点となっている。この事から第1図の土器を堀之内式とするのは難しいのではないか。それでは堀之内式以外のどの時期に帰属するのであろうか。

伊篠白幡遺跡からは前述したように前期では黒浜式，浮島・諸磯式，中期では五領ケ台式，阿玉台式，中峠・勝坂式，加曾利E式などが僅かばかり出土している。第1図の土器は胎土に繊維を含まないことから早期後半から前期前半の可能性はない。さらに器形や文様構成の点で前期後半から中期の時期にふくまれる可能性は低いのではないかと思われる。また，後期は加曾利B式が遺跡内から僅かに出土しているが，細い半截竹管の使用や特殊な羽状の沈線文，器面の調整方

法などの点で加曾利B式とするのも難しいのではないか。

最近になってこの第1図の土器について早期の田戸下層式ないしは田戸上層式の時期にあたるのではないかとのご指摘をいただいた。さしあたって考えられるのは早期の沈線文系土器のうち，曲線文が現れる田戸下層式の後半から田戸上層式の前半にかけての時期にあたるのではないかとと思われる。ただ伊篠白幡遺跡から出土している田戸下層式ないし上層式の土器は，小破片でしかも出土量は極めて少なかったことから，同時期であるとするならば，この土器のみ遺存状態がよい点はやや異質な感じを受ける。

早期の資料で伊篠白幡遺跡例に類似する文様構成の土器が木更津市台木B遺跡から出土している（安藤1996）。第4図に実測図と展開図を示した。台木B遺跡例は西川博孝氏の3細分（西川1987）によるならば田戸下層式新段階にあたる。報文では「2条1単位の横位太沈線に区画された中に文様を充填したもので，主文様として太沈線による蕨手状文様を中心に，松葉状に斜位太沈線を施文し，その外側に2条の，内側に1条の細沈線を加えている。また胴部は2条の横位太沈線間に異方向の斜沈線をそれぞれ施文し，最下段に斜位太沈線を配して，無文となるものと考えられる。さらに口縁部は外傾した角頭状をしており横位に丁寧になでている。胎土は数mmの石英等の小砂礫を含み，



第4図 台木B遺跡資料

焼成は良好である。」この土器の下段に見られる「松葉状」の斜位太沈線は2条1組の横位太沈線によって挟まれている。施工工具は異なるものの伊篠白幡遺跡例に見られる羽状の横位沈線文の構成とほぼ同じであると見てよい。単純な羽状の沈線文の例では、空港No.60遺跡<sup>1)</sup>などからも出土しているが、台木B遺跡例のような羽状の沈線文は類例を知らない。

岡本東三氏は田戸下層式に出現する曲線文について干潟町桜井平遺跡出土例と台木B遺跡出土例を比較し、渦巻文の出現と発達について論究した中で、台木B遺跡例の渦巻文について「渦巻の直線部が菱形区画の一辺を構成し、より自立的に描出され」「渦巻紋が伸びやかに展開し、独立した意匠に発達しようとする姿が読みとれる。また、田戸上層式に入り、入組紋に発展する前段階を迎えている」と述べている(岡本2001)。台木B遺跡例の渦巻文は未だ独立した渦巻文にはいたっていないと言えるが、伊篠白幡遺跡例は、完全に独立した単位文様となる入組文であり、この点は大きな違いである。ただ角頭状の口唇部を伴い直線的に開く器形であること、施工工具は異なるものの羽状の沈線文を伴う点など類似点も認められることから、伊篠白幡遺跡例を台木B遺跡例とほぼ同じ時期の土器と判断してもよいのではなかろうか。さらに言及すれば伊篠白幡遺跡例は、台木B遺跡例に見られる渦巻文が互いに連鎖して入組文へと変化し、独立した単位文様となっていることから、台木B遺跡例よりも若干新しい段階の土器であると判断できるであろう。また器形的には、田戸下層式新々段階になると、口頸部のくびれが顕著となり口縁部と胴部の文様が分離し始めることから、伊篠白幡遺跡例は田戸下層式新々段階には至っていないと思われる。岡本氏は前出の論考の中で田戸上層式の入組文について「田戸上層式は3段階に分けられる。この時期の曲線紋の特徴は、渦巻文が入組紋となり、渦巻部が絡み合って展開することである。もう一つは、渦巻文が一本の沈線で描出されるのではなく、2本の沈線で帯状に表出されることである。」と述べているが、伊篠白幡遺跡例が田戸下層式新段階であるとするならば、田戸上層式古段階に一般化するこれらの要素は田戸下層式新段階から次第にみとめられるようになるのではないかとと思われる。

## 5. おわりに

以上、伊篠白幡遺跡から出土した土器について検討してみた。一応の結論として田戸下層式新段階の土器として判断したいが、ある種の疑問が残らないわけではない。田戸下層式・上層式を通じて伊篠白幡遺跡例のような曲線文を細い半截竹管で描く例は極めて少ないのではないかと。田戸下層式の細沈線などにおいては、その多くが先端の細い棒状工具によっている。また、伊篠白幡遺跡例に見られる沈線文の特殊な末端処理の技法については今のところ類例を知らない。岡本氏は第4図に示した台木B遺跡例の渦巻文について「報告書の実測図では、施紋されたB型渦巻紋は右側渦巻紋(3回転)から描出され、左側渦巻紋(1回転)で終わるように表現されているが、この部分も欠損している。砂粒の動きを見ると、右から左に描出されている。」<sup>2)</sup>としており、岡本氏の観察どおりであれば、左側渦巻紋は右側渦巻文から延びる太沈線の末端を回転処理したことによって発生した文様である可能性も考えられる。施工工具の違いはあるものの伊篠白幡遺跡例に見られる沈線文の末端の回転手法も、台木B遺跡例で推測される末端処理方法の延長線上にある手法ではないかと思われる。

最後に貴重なご指摘と御意見をいただいた西川博孝、岡本東三、小笠原永隆各氏、また遺物の探索にご協力いただいた安井健一氏には記してお礼申し上げます。

## 注

- 1) (宮ほか1994)の第26図87は、太沈線による菱形状の細い区画文の中に横位の沈線を1条走らせ、それによって上下に分けられた空間に異方向の沈線を充填して羽状の文様を描出している。田戸下層式新段階の土器である。
- 2) (岡本2001)の文献の注(7)

## 参考文献

- 安藤道由 1996年『兎谷・上時田・下時田・向台木・台木B遺跡』(財)君津都市文化財センター
- 岡本東三 2001年「縄文土器における曲線紋の成立」『千葉県史研究』第9号
- 西川博孝 1987年「田戸下層式土器-千葉県内の新資料を加えた検討-」『古代』第83号
- 三浦和信・宮城孝之ほか 1986年『酒々井町伊篠白幡遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 宮重之ほか 1994年『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』(財)千葉県文化財センター
- 宮城孝之 1994年「酒々井町伊篠白幡遺跡出土の土製品について」『研究連絡誌』第40号(財)千葉県文化財センター